方向

第一七四号　一九九六年一月一〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

李賀歌詩編

（訳注稿　九）

1995 08 21　原田憲雄

（一〇四二）

洛陽の美女　真珠

洛姝真珠

〔洛姝真珠〕　・洛姝　洛は唐代の東の都の洛陽（河南）、姝はそこの代表的な美女の意で、名は真珠。詩中の「花袍白馬」の人を思い続ける真珠と、男たちを次々ひきつける遊女たちを対比して歌う。

・第三句の「玉鼇」以下、一葉（二頁分）が欠け、後人が補写し、テキストとしては不安定である。

（一〇四二）

美しくかわいい真珠　青空から降りてきて
洛陽の花園に　さやさや　香しい風が吹きめぐる
ひいやり鬢の毛　斜めに挿したかんざし光る　燕のように
たかどので　月に向かって歌ってる　玉磬を打ちながら
蘭吹く風　木犀におく露を　くらい翠にしたたらせ
くれないの琴の音　雲にまつわり　深い思いに咽び泣く
花やかな軍服で白馬に乗ったあの人は　帰ってこない

〇一　真珠小娘下青廊
〇二　洛苑香風飛綽綽『
〇三　寒鬢斜釵玉鼇光
〇四　高樓唱月敲懸璫『
〇五　蘭風桂露洒幽翠
〇六　紅絃裊雲咽深思
〇七　花袍白馬不歸來

濃い眉毛　柳たたんで　匂やかなくちびるは酔う
金の鵝鳥の屏風には　蜀の巫山の夢をえがき
鸞のもすそ　鳳凰の帯　行きかう雲と雨おもく
八つの窓があかるんできて　頬そむければ
日の光　糸をちらして　うすぎぬの部屋にかげろう
まちの南のくるわでは　秋の淋しさなんぞなく
細腰の楚の女　黒髪の衛の女ら　四季とりどりに
嫋々と玉を転ばす声あげて　空の光も払いのけ
雲でも雪でも陸さんでも　引きずりこんで居続けさせる

〇八　濃蛾曼柳香脣醉』
〇九　金鵝屏風蜀山夢
一〇　鸞裾鳳帯行烟重
一一　八牕籠晃臉差移
一二　日絲繁散曛羅洞』
一三　市南曲陌無秋涼
一四　楚腰衛鬢四時芳
一五　玉喉篠篠排空光
一六　牽雲曳雪留陸郎』

〇一〔真珠小娘　青廓より下り〕　・小娘　少女。娘を毛氏本が「嬢」とする。　・青廓　青空。そこから下りてきた少女は、天女のような娘。青を明本などが「清」とし、廓を錦囊集などが「郭」とする。

〇二〔洛苑　香風　飛んで綽綽〕　・洛苑　洛陽には有名な庭園が多かった。しかしここでは、真珠がやってきたことによって洛陽全体がいい匂いになった、ということ。　・飛　朝鮮本は「吹」とする。意味は分かり易いが表現としては平凡になる。　・綽綽　擬声音。李賀の詩に使われている擬声音にぴったりの日本語を見つけるのはなかなか難しいが、ここのは拙訳の如くであろう。

〇三〔寒鬢　斜釵　玉燕の光〕　・玉燕　別国洞冥記「神女、玉釵を留めて帝に贈る。帝以て趙婕妤に賜う。既に匣を発くに白燕あり。飛びて昇天す。のち宮人学びてこの釵を作り、玉燕釵と名づく」（二）

○四〔高楼　月に唱えて懸璫を敲つ〕　・唱　錦嚢集は「喝」とするが、誤り。　・懸璫　分かりにくいが、「金玉の響器」（呉正子）で、拙訳のように玉磬であろう。トライアングルにあたるか。

○五〔蘭風　桂露　幽翠に洒ぐ〕　・洒　曽益などが「灑」とし、音義ともに同じ。　・幽翠　地上の草の色（鈴木説）であろう。

○六〔紅絃　雲に裹わり　深思に咽ぶ〕　・紅絃裹雲　真珠の弾く絃楽器の紅色の絃から発する音が雲にまつわりつくような感じがする。礼記に「清廟の瑟は朱絃にして疎越」（楽記）というように瑟の琴は赤いのが古来の伝統で、唐代の他の詩人の作品にもしばしば紅絃が現れる。

○七〔花袍　白馬　帰り来たらず〕　・花袍白馬　真珠の恋人。花袍は花やかな模様のある長い上着。白馬は楽府に「白馬篇」があって、国のために働いて功を立てる青年も歌うが、「遊侠少年」カッコヨク戦争で一旗上げよう、といった青年もでてくる。彼らが「帰ってこない」のは、戦死するのもあろうが、行く先々で恋人を作って、もとの女のことなどはきれいに忘れてしまっているのだ。

○八〔濃蛾　柳を畳んで　香唇酔う〕　・濃蛾　濃い眉毛。蛾を宋蜀本などが「娥」とするが誤り。　・畳柳　柳眉が愁いのためにひそむ。　・香唇酔　愁いを忘れようとして酔う。

○九〔金鶩の屏風　蜀山の夢〕　・金鶩　金の鶩鳥。屏風の模様。鶩を蒙古本などは「娥」とする。それなら美人。　・蜀山　蜀（四川）の巫山。神話で赤帝（神農）の娘の瑶姫（姚姫ともいう）は夭折してこの山の神女となった。戦国時代、楚の懐王が、雲夢（湖北）の高唐という宮殿で昼寝をした。夢に巫山の女と称する女が現れ、契りを交わす。別れるとき、わたしは巫山の南にいて、朝は雲、夕べは雨となってあなたを待つ、といって消えた。懐王の子の襄王が雲夢に行ったとき文士の宋玉からこの話を聞

き、その夜、同じような夢を見た。女は瑶姫だった。宋玉の「高唐賦」「神女賦」がこれを描く。このことから「雲雨」は情交の代詞となった。真珠は、神女のように、恋人と契っている夢を見るのである。

一〇〔鸞裾　鳳帶　行烟　重し〕　・鸞裾鳳帶　鸞の模様のもすそ。鳳の模様の帶。裾を、宋蜀本などは「裙」とする。意味は同じ。　・行烟　行き交う烟気。「雲雨」である。

一一〔八聰（驄）　晃を籠めて　臉　差や移る〕　・八聰　驄は、董懋策がいうように「聰」とするのがよい。聰は窓。鮑照「鳳楼十二重、四戸八綺窗」（代陳思王京洛篇）　・籠晃　晃はひかり。窓の中にぼおっと光がさしこんできた感じがうまくあらわれている。　・臉　頬。蒙古本などが「瞼」とし、それでも通じはするが、劣る。光が女の頬のあたりに及び、夢がとぎれる。しかしまだ醒めきらない頬を光からすこしそむける。　・差　朝鮮本が「乍」とするが、よくない。

一二〔日絲　繁散　羅洞　曛ず〕　・日絲　太陽の光線。　・繁散　文字通り、繁く放散すること。　・羅洞　うすぎぬで覆われた部屋、あるいはベッド。　・曛　くすんだように明るいこと。ここで真珠についての描写はおわり、次の四句には、真珠とは対照的な遊女たちを描く。

一三〔市南　曲陌　秋凉　無し〕　・市南　洛陽は南部に繁華街があった。　・曲陌　遊郭。　・秋凉　秋のような淋しさ。凉を、蒙古本などが「涼」とする。

一四〔楚腰　衛鬢　四時　芳し〕　・楚腰衛鬢　楚には細腰の美人が多く、衛には黒髪の美女が多かった。韓非子「楚の霊王細腰を好んで国中餓人多し」（二柄）左伝「（衛）公城上より己氏の妻の髪の美なるを見る」（哀公一七年）「浩歌」（一〇三四）参照。

一五〔玉喉　篠篠　空光を排し〕　・篠篠　節回しの巧みなこと（呉正子）

一六〔雲を牽き　雪を曳いて　陸郎を留む〕　・牽雲曳雪　王琦は、雲も雪も遊客の袖の模様とするが、拙訳のようにとっていいのではないか。　・陸郎　女たちに慕われる男の代称。無名氏の楽府「陸郎班騅に乗ず」（明下童曲）李賀「陸郎去りぬ班騅に乗じて」（夜坐吟　四一七七）

（一〇四三）

李夫人

李夫人

〔李夫人〕　・楽府詩集は「李夫人歌」とする。漢の武帝の愛した李夫人の死を歌う。夫人は、漢書によれば、楽師李延年の妹である。延年が新曲を作って歌う「北方佳人あり。世にこえて独りすぐれたり。一たび顧みて人の城を傾し、再び顧みて人の国を傾さん。いずくんぞ傾城と傾国とを知らざらん、佳人は得難きかな」帝「ああ、世のなかにそんな人がいるものか」帝の姉の平陽公主が「延年に妹がいます」召し出すと麗しく舞いに優れているので帝は愛した。男の子ができたのち、発病し危篤となった。帝みずから病室を見舞うが「病気のため見苦しく、お目にかかれません。お子の王と、わたしの兄弟のことをお願いします」といって、会おうとしない。帝「危篤だというから、もう起きられまい。わたしに会って、王と兄弟のことを頼んでもいいじゃないか」夫人「女は、形を整えずに君や父に会ってはならぬということです。しどけない姿でお目にはかかれません」帝「ただ一目会ってくれれば、千金を賜い、兄弟を高官につけよう」夫人「高官はお上のご意志にあって、会うことにはございません」帝はどうしても顔を見ようとするが、夫人は体を背けてすすり泣き物も言わない。帝は不機嫌になって立った。夫

人の姉妹が見かねて「お目にかかってわたしたちのことを頼んでくれたらいいのに」夫人「お会いしないのは、あなたがたのためなのよ。お上が愛されたのは、病気にならないときの顔形。形で愛されるものは、形が衰えれば愛もゆるむ。今のわたしの顔形をご覧になれば、かならず疎まれましょう。そのうえ兄弟の世話までされると思って」夫人がなくなると、帝は皇后の礼で葬った。その後も夫人のことが思われてならない。占い師の少翁というものが、夫人の魂を招くことができると言う。夜、灯燭を張り、帷帳を設け、その中に美女をおいて、隔たった他の帳から帝に望見させた。李夫人のように見えるが、帝には近づけない。帝はいよいよ恋しく、詩を作った。「おまえでは　ないのか。立って　見ようとすると。ゆらゆらして…　どうして　ためらって　ここに　来ようとは　しないのか」（是邪非邪、立而望之、翩何　其来遅）楽師たちに歌わせ、別に賦を作って悼んだ（外戚）

・底本ではこの詩の全文が補写である。楽府詩集（八四）文苑英華（一四六）全唐詩（二九）参照。

・後の詩人に夫人を歌う者が多いうち白居易の新楽府「李夫人」が長編で有名だ。賀のものとどちらが早いか分からぬが、たぶん賀の方があとで、居易の作品に対する批判を含むであろう。拙稿「夫人飛入瓊瑶臺」（李賀論考）参照。

（一〇四三）

天上の紫皇宮殿の　幾重の扉　つぎつぎ開らけ　〇一 紫皇宮殿重重開

夫人は　飛んではいられた　白玉の楼中に　〇二 夫人飛入瓊瑶臺

繡（ぬ）いうるわしい閨のとばりに　緑の香りは絶えないが　〇三 緑香繡帳何時歇

青雲は光りなく　宮中を流れる水は　咽び泣く　〇四 青雲無光宮水咽

はらはらと　木犀の花が散る　秋の月夜に
孤独の鳥の鬻さけび　琴はせまった響きをあげる
くれないの壁に遺った飾り玉　しょんぼり掛り
悼歌台に並ぶ少女ら　ぼうぜんと　ただのぞみ見る
水時計したたりやまず　鶏人は時を告げるが
露おく花と　蘭の葉と　いりみだれ　きらめくばかり

〇五　翩聯桂花墜秋水
〇六　孤鸞驚啼商絲發』
〇七　紅壁闌珊懸珮璫
〇八　歌臺小妓遙相望
〇九　玉蟾滴水雞人唱
一〇　露華蘭葉參差光

〇一〔紫皇の宮殿　重重（じゅうじゅう）開き〕　・紫皇　天帝。「李憑箜篌引」（一〇〇一）参照。
〇二〔夫人　飛び入る　瓊瑤台（けいようだい）〕　・瓊瑤臺　美しい玉で造られた天上の楼台。瓊瑤は詩経に「之に報ずるに瓊瑤を以てす」（衛風木瓜）というように美玉。また屈原の離騒に「瑤台の偃蹇たるを望む」というのは玉のうてなではあるが地上のもの。李白が「清都の緑玉樹、灼爍瑤台の春」というのは天帝の都のことらしいが、楽しそうな春景色である。瓊瑤と台を結び付け、夭折の人の入るべき天上の楼閣を表現したのは、たぶん賀が初めである。後に李商隠の伝えにより、賀の死が「白玉楼中に入る」とよばれるようになるが、それもこれらの作品に由来するのであろう。初二句は夫人の死をいう。
〇三〔緑香（りょっこう）繡帳（しゅうちょう）何れの時にか歇（や）まん〕　・緑香繡帳　女主人の去った後の李夫人の部屋の刺繡（ぬいとり）うつくしい帳（とばり）やただよう香煙。徐陵「繡帳羅帷燈燭を隠す」（烏棲曲）
〇四〔青雲（せいうん）　光無く　宮小咽（きゅうしょうむせ）ぶ〕　・青雲　晴天の空。楚辞「青雲を渉って以て汎濫として游ぶ」（遠遊）
〇五〔翩聯（へんれん）たる桂花　秋月に墜（お）つ〕　・翩聯　宋蜀本などは「翩翩」とする。　・墜　文苑英華は「逐」

とし、その注は「堕」とする。　・この句は武帝の「桂枝落ちて銷亡す」（李夫人賦）を典拠とする。

○六〔孤鸞　驚啼して　商糸発す〕　・孤鸞驚啼　陶淵明「上絃別鶴もて驚かせ、下絃孤鸞を操る」（擬古五）の孤鸞は琴曲の名だが、この句には孤独になった武帝のイメジが込められている。　・驚啼　けたたましい鳴き声。驚を文苑英華は「暁」とするが、よくない。　・商絲　七絃琴の第二絃。商絃ともいう。高誘は「商は五音に於て最も細にして急」（淮南子注）という。その絃が発動すれば、音楽は悲しい調子になる。絲を文苑英華は「絃」とし、その注は「綵」とする。

○七〔紅壁（壁）　蘭珊　珮璫を懸く〕　・紅壁　紅を文苑英華が「空」とする。壁を宋蜀本などが「壁」とし、それがよい。楚辞「紅壁沙版、玄玉の梁あり」（招魂）　・蘭珊　ひしゃげたり、ちらばったりしたさま。音の形容ととる解釈があるが、よくないだろう。　・珮璫　玉の飾り物。珮を、明本などが「佩」とする。それなら帯び玉で、夫人の生前に着けていたものだろう。

○八〔歌台の小妓　遥かに相望む〕　・歌臺小妓　夫人に仕えていた歌舞隊の少女たちが、霊を慰めるため歌台に並べられているが、悲しみのために歌うのを忘れ、天を仰いで茫然としている。妓を明本の注は「柏」とするが、よくない。

○九〔玉蟾　水を滴らせ　鶏人唱う〕　・玉蟾　玉で彫刻したヒキガエル。水の容器で、文具あるいは水時計に使用する。西京雑記に「玉蟾蜍一枚、大きさは拳の如く腹空にして五合の水を容る」（六、晋霊公冢）「浩歌」（一〇三八）参照。　・雞人　「九月」（一〇三三）参照。

一〇〔露華　蘭葉　参差として光る〕　・露華　「竹」（一〇〇六）参照。　・参差　「四月」（一〇二七）参照。唐の太宗「日麗しく参差たる影」（芳蘭）「露を点じて参差として光る」（詠桃）

・この詩には、悲しみという言葉も苦しみという言葉も使ってないが、愛するものを失った人間の悲しみが露華となり蘭葉となって参差として光っている。これに対置してなお色の褪せない詩があれば、その作者を《愛の詩人》といってもよいだろう。

（一〇四四）

走る馬のうた

走馬引

〔走馬引（そうばいん）〕　・樗里牧恭（ちょり・ぼっきょう）の作といわれる「走馬引」に因んで、暗殺の思想を歌う。もとの「走馬引」は崔豹によれば、樗里牧恭という青年が、父の仇を殺して逃げ山に隠れていた。夜、天から馬が降りてきて小屋を囲んで鳴く。青年は目覚め、追跡の役人かと思い、走って逃げ、翌朝、調べてみると馬の蹄の跡だった。そこで自分の居る処の危険なことに気付き、沂沢（きたく）という土地にゆき、そこで琴を弾いて天馬の声にならって歌を作り「走馬引」と名付けた（古今註中）この歌はまた「天馬引」とも呼ばれる。樗里牧恭については、これ以外に何も知られていないが、李賀はさらにいろいろの人物のイメジを重ねているようである。　・底本ではこの詩の全文が補写。楽府詩集（五八）唐文粹（一二）全唐詩（二二三）拙稿「走馬引」（李賀研究七）参照。

（一〇四四）

おれさまの　郷里におさらばする剣　　〇一　我有辭鄉劒
切っさきは　浮き雲もぶった斬るのだ　　〇二　玉鋒堪切雲

襄陽に馬を走らすますらお
意気おのずから春となる
気にくわぬ　朝の剣の鋩の浄さ
気にくわぬ　暮れの剣の光の冷たさ
持ってやるのは人に刃向かう剣だから
しゃらくさい　わが身を照らすことなんぞ

○三　襄陽走馬客
○四　意気自生春
○五　朝嫌剣光浄
○六　暮嫌剣光冷
○七　能持剣向人
○八　不解持照身

○一「我に郷を辞する剣有り」　・我　樗里牧恭の一人称。この人物については、よくわからないが、本名ではなく、たぶん荘子のいう「道端に立てておいても大工が見向きもせぬ」（逍遥遊）ようになんの役にも立たない樗という木の生えている貧しい土地にみずから居をえらんで住む牧童で、平生は恭しい人柄だったから「樗里牧恭」と人が呼んだのであろう。父の仇討ちに人を殺したといえば、父は人に殺されたのであろう。子を恭しく育てた父は、学徳ある大官で、その父が殺された後、殺した人はぬくぬくと高位に富み栄え、牧恭は楚の賢宰相孫叔敖の子のように零落し、牧童となって薪を負ったのであろう（拙稿「負薪」参照）権勢や富貴を求める人ではない。父の仇がのうのうと目の前でのさばっていなければ、無名のまま牛馬を牧して一生を終えたであろう。子は仇を討たざるを得ず、仇を討つことによって法外の者となり、仇を討った剣一振りを携えて、誰も住もうとしない貧しいその故郷をすら立ち去らねばならなくなった。「樗里牧恭」は、かれひとりに限定されぬ。そのような状況に生きる孤独な放浪者ならば、アイヌ、インディアンなど、氏族、民族、国家をこえて象徴となる人物である。

○二「玉鋒（ぎょくほう）雲を截（き）るに堪（た）えたり」　・截雲　曽益は荘子の次の話を典拠と指摘する。むかし趙の文王は剣を好んだ。剣士三千が養われ、日夜撃剣し、年に百人が死に、三年たって国が衰え、諸侯がその隙に付け入ろうとする。太子が心配して王の心を翻してくれと荘子に依頼する。いったんは断わったが、やがて引き受け、剣士の姿で王に会う。王は門下の剣士と試合させようとして聞く「そなたは長剣をとるか、短剣をとるか」荘子「どちらでも結構です。だがわたしは三種の剣を持っている。それをまず説明しましょう」王「聞かせてもらおう」荘子「天子の剣、諸侯の剣、庶人の剣がこれです」王「天子の剣とは」荘子「天子の剣は、…五行を以て制撫し、刑徳を以て使用の可否を論じ、陰陽を以て抜き、春夏を以て構え、秋冬を以て一撃する。…上は浮雲を切り、下は大地を切る。この剣を一たび使用すれば、諸侯を匡正し、天下は帰服する。これぞ天子の剣です」文王は茫然として自失し「諸侯の剣は」荘子「諸侯の剣は…上は天に則り、日月星辰に従い、下は地に則り、四時に従い、国内の民意を和らげ、以て四方を安定させる。この剣をひとたび使用すれば雷霆の震うがごとく、天下尽く賓服し、君命に聴従しない者はなくなります」王「庶人の剣は」荘子「庶人の剣は、髪ふりみだし、冠おどろに、野ばかま、目を怒らせ、ののしり、進んで相討ち、上は首をはね、下は肺肝をきる。これが庶人の剣、闘鶏と同じこと。いったん命絶えたら、国事に用無し。いま大王は天子の位にいて庶人の剣がお好きです。わたしは内心、大王にも似合わぬことだと思っています」文王は宮中を出ず、三か月後には、剣士はみな自殺した（説剣）賀の「截雲」がこの話に基づくなら、その玉鋒は「天子の剣」でなければならぬ。天子は天下の主であろう。それなら天下は天子の郷里、天子の剣にとってもその故郷は天下であろう。天下を故郷とするものが郷を辞するとは、天下を拒否するに他ならぬ。天下を拒否する剣をもつ「我」は

樗里牧恭であった。牧恭が父のために仇を殺したのは、天子の為すべきことを天子がせぬゆえに、庶人の牧恭が天子の為すべきわざを代行したことになる。すなわちその行為に於て牧恭は「天子」だといわねばならぬ。「天子」の持つ剣が「天子の剣」であってふしぎはない。「天子」はしかし、天子が天子の為すべきことを行なわぬ世にあっては、「非理無法の人」として天子の役人の追跡を受けなければならぬ。天の使役である天馬が、天子にくみせずに牧恭にくみしたのは、天子が真の「天子」でなく、牧恭こそ「天子」であることを証するものでなくして何であろう。「天子」でないものが天子を僭称し、「庶人の剣」を天子の剣と偽称して、侵略し、凌辱し、暴虐しつつあるとき「天子」は法外の者たらざるをえず、「天子の剣」もまた庶人の剣を偽装して、天子を僭称する者とその一味の血をするほかはないであろう。

○三〔襄陽（じょうよう）走馬（そうば）の客〕　・襄陽　湖北の大都会で、三世紀に曹操が襄陽郡を置いてから六朝の全期を通じ重鎮の地だった。「大堤曲」（一〇一八）参照。楽府詩集などの注が「長安」とするが、よくない。長安が、天子が「庶人の剣」を振るう場所となれば、襄陽は庶人が「天子の剣」を温存する場所とならざるを得ない。天子が僭称者に過ぎないことを見極めたとき「天子」は、天子の法の外の者とされても恐れる理由はない。　・走馬客　客を唐文粋などが「使」とする。

○四〔意気　自（おのず）から春を生ず〕　・天子の威勢がにせものならば、法外者の意気、自ずから春を生ぜざるを得ぬではないか。

○五〔朝（あした）には嫌う　剣花の浄（浄）きを〕　・剣花浄　剣花は剣の銹。「春坊正字剣子歌」（一〇一五）参照。花を宋蜀本などは「光」とする。浄は、冷たい、で次の句の冷と重複する。蒙古本が「浄」とし、

それがよい。楽府詩集などは「静」とする。　・不浄が浄とされるとき「天子の剣」が浄を嫌うのは当然である。

○六〔暮には嫌う　剣光の冷なるを〕　・劒光　光を蒙古本などが「花」とする。　・冷酷な政治が仁慈と偽称されるとき、仁慈の心臓を貫いて、冷え切った「天子の剣」を温めてやろうとするのは、法外の「天子」の止むに止まれぬ感情であろう。

○七〔能く剣を持して人に向うも〕　・剣は、それを取って、人に向かうためにある。

○八〔解せず　持して身を照らすを〕　・身を照らすためには鏡を手にとればよい。　・楽府詩集などの注が「解持照身影」とするが、よくない。

・《平和のための武器》とは、それ自身、矛盾である。荘子のいったのは寓言である。李賀のは鬼詩である。武器を持つ以上は徹底的に戦うがいい。正義か不義かは徹底的に論争するがいい。それが「天子」だ。理論の不徹底を武器でよろい、鎧の袖を理論の衣で隠す。世の天子どもが「庶人の剣」を振りまわす世の中では、青白い病詩人も「天子の剣」をたたいて暗殺者とならざるを得ず、非理が理を僭称するとき、理は非理をよそおって狂乱せざるを得ない。

（一〇四五）

湘　妃

湘妃

〔湘妃〕　・古帝堯の娘で、舜の妻となり、旬の死後、湘水の神となった娥皇と女英を歌う。「李憑箜

篌引」（一〇〇一）「帝子歌」（一〇四〇）参照。・妃を蒙古本は「沈」とするが、誤り。・底本ではこの詩の第六句の「巫」字まで補写。楽府詩集（五七）全唐詩（二三）参照。

（一〇四五）

まだらの竹は　老いて　千年　なお死なず
ながく女神に伴なって　湘水をおおっている
蛮社の女の歌声が　寒々とした空に満ち
九疑山　緑しずかに　くれないの涙のはな
鸞と鳳　けぶる梧桐の樹海で　別れ
巫山の雲や蜀の雨が　遥かにここに通うばかり
幽愁の秋の気は　青い楓のこずえにのぼり
すさまじい夜に　波間では　古代さながら龍の鳴く声

〇一 筠竹千年老不死
〇二 長伴神娥蓋湘水
〇三 蠻娘吟弄滿寒空
〇四 九山靜緑涙花紅
〇五 離鸞別鳳烟梧中
〇六 巫雲蜀雨遥相通
〇七 幽愁秋氣上青楓
〇八 涼夜波間吟古龍

〇一〔筠竹　千年　老いて死せず〕　・筠竹　礼記に「竹箭の筠あるが如し」（礼器）といい、鄭玄の注に「筠、竹の青皮也」という。ここの筠竹は斑竹。王琦の注は筠を「斑」とする。

〇二〔長く神（秦）娥に伴って湘水を蓋う〕　・秦娥　秦を楽府詩集などの注に「神」とし、それがよい。神娥は、神となった美女の意。王琦の注は秦を「英」とする。英娥なら女英と娥皇。

〇三〔蛮娘　吟弄して　空に満つ〕　・蠻娘　南方少数民族の女。娘を毛氏本は「嬢」とし、王琦の注は「風」とする。　・吟弄　くちずさむ。李白「嬴女吹玉簫、吟弄天上春」（鳳凰曲）　・寒空　李頎

「蕭条　已に寒空に入って静かなり」（宿瑩公禅房聞梵）

○四〔九山　静緑　涙花　紅なり〕　・九山　九疑山のこと。疑は嶷とも表記する。九歌「九嶷繽として並び迎え、霊の来ること雲の如し」（湘夫人）賀と同時代で年長の陳羽が「九山白日に沈み、二女滄洲に沈む」（湘妃怨）といい、舜、すなわち湘妃の夫の廟がある。

○五〔離鸞　別鳳　烟梧の中〕　・離鸞別鳳　離別して孤独となった鸞や鳳。湘妃と舜のイメジを託す。

○六〔巫雲　蜀雨　遙かに相通ず〕　・巫雲蜀雨　蜀の巫山の雲と雨。「洛姝真珠」（一〇四二）参照。

・遙相通　巫山の神女の雲となり雨となったような恋慕の思いのみがここにもただよう。

○七〔幽愁　秋気　青楓に上り〕　・幽愁　深い愁い。白居易「別に幽愁暗恨の生ずる有り」（長恨歌）

・秋気　呂氏春秋「秋気至れば則ち草木落つ」（義賞）　・青楓　全唐詩注などが「清峰」とする。

○八〔涼夜　波間に　古龍　吟ず〕　・涼夜　すずしい夜ではあるが、謝荘が「涼夜自淒」（月賦）というように、現代日本語の「すずしい」よりは「すさまじい」というべき方向に傾く。

（一〇四六―一〇五八）

南園　十三首

南園十三首

〔南園〕　・詩の内容から察すると、李賀の荘園のようで、北園とともに、そこから上る収入が家計の中心だったようだ。この連作詩は、南園の風景やそれにまつわる感想をのべ、奉礼郎をやめて帰郷した八一三年か次のとしの作であろう。一時に一気に作ったものかどうかは分からぬが、あまり長くない期

間に作り、前後一貫するように編集したものと察せられる。

その一

花の枝　草の蔓……　眼中にひらけ
小さく白いのや　長く紅いのや　越の国の女のあごみたい
かわいそうに　日暮れには　なまめいた香りも失せて
春風にお嫁いりかい　なかうどなしで

（一〇四六）

○一　花枝草蔓眼中開
○二　小白長紅越女腮
○三　可憐日暮嫣香落
○四　嫁與春風不用媒

○一〔花枝（かし）　草蔓（そうまん）　眼中に開け〕　・花枝　謝朓「花枝聚って雪の如し」（与江水曹至于浜戯）王維「暮雀花枝に隠る」（晩春閑思）　・草蔓　唐の太宗「葉鋪きて草蔓荒る」（過旧宅）なお鮑照に「蔓草高隅に縁る」（行薬至城東橋）の句がある。　・眼中　眼の中という意味だが、そこには「常に心に思っているもの」の意を含む。長安でくだらぬ役人生活をしていた間たえず思われた花や草が、今こうして見えてきた、という喜びが、この一句には溢れている。だから三、四句の諸諧が出てくるのだ。

○二〔小白（しょうはく）　長紅（ちょうこう）　越女（えつじょ）の腮（あご）〕　・小白長紅　こどもの言葉みたいだが、即物凝視と感覚転移の結びついた新鮮な表現は中国の文学語としては珍しい。しかし先行するものがないわけでもない。唐の太宗「斑紅蕊樹を妝い、円青溜荆を圧す」（春日登陝州城樓）などがそれ。太宗と李賀の関わりについては拙稿「唐の太宗」参照。　・越女腮　越は今の浙江で、西施などの美人の産地として知られる。腮はあご。梁の昭明太子「蓮花水に泛び、艶なること越女の腮の如し」（錦帯書十二月啓五月）

○三〔憐れむべし　日暮　嫣香落ち〕　・可憐　王維「新妝可憐の色」（晩春帰思）の可憐は「かわいい」方向にあるが、そのかわいいものが衰退にむかえば「かわいそう」になる。李賀が「南園」をつくるとき王維の作を意識していたのは間違いない。師の韓愈もこのころから王維の詩文に親しみ研究している。・嫣香　嫣は説文に「長い貌」というように、すらりとした美しさをいうが、宋玉「嫣然一笑」（登徒子好色賦）というように、あでやかな笑顔にあてていうことが多い。嫣と香を結ぶのは賀の造語か。

○四〔春風に嫁与する　媒を用いず〕　・嫁與　與は調子を整えるための接尾辞。

・風景をうたったものだが、それだけでない感じもする。あるいはかれの荘園の農夫の子で、小さいとき可愛がり、帰郷してみるとすっかり娘っぽくなっていたのが、出稼ぎの青年と駆け落ちした、というようなことがあったのかもしれない。

その二　（一〇四七）

離宮の北の田んぼは　暁の気にみちて　○一　宮北田塍暁氣酣
露を含んだ萌え苗の桑の葉　御簾にざわめく　○二　黄桑飲露窣宮簾
腰高のげんきな農婦が　そっと枝を手折っていた　○三　長腰健婦偸攀折
呉王にみつぐ　八度繭の蚕を飼うためか　○四　將餧呉王八繭蠶

○一〔宮北の田塍　暁気　酣に〕　・宮北　昌谷の東に隋代に創建された福昌宮があった。その宮殿が賀の南園の南にあったのであろうか。それなら南園は宮殿の北にあたる。もっとも、昌谷の地理を調査し

た劉衍は、この「宮」を連昌宮だとする。いずれにしても昌谷付近のこれら行宮は安禄山の変以後、使われず、荒廃した。この宮も李賀のころには、その苑内にひとが立ち入るほどに、警戒もおろそかになっていたのだろう。「過華清宮」（一〇一〇）参照。　・田塍　田畑のうね。干宝の搜神記に、蟹が鼠になった話があり「その行くや田塍を過ぐる能わず」といい、田塍は田塍と同じだが、この文が晋の干宝のものかどうかは確かでない。「田塍」の語を詩に使ったのは賀が初めか。

○二〔黄桑　露を飲んで　宮簾に窣たり〕　・黄桑　萌え黄色の桑の若葉。　・飲露　しとどに露を帯びた様を擬人化した言い方。　・窣　穴から俄に飛び出すさまをいい、またそれに似た行動が発する音を形容する。賀は「神絃」（四二〇九）でもこの文字を使う。唐の玄宗「灞岸の垂楊地に窣として新たなり」（初入秦川路逢寒食）　・宮簾　行宮の建物にかかる御簾。

○三〔長腰の健婦　偸に　攀折す〕　・長腰　長腰は、腰が長いのだが、腰部だけが長いのではなく、丈が高くて腰部から下が長いことをさすので、日本語でなら腰高にあたるだろう。　・偸　離宮内の桑の葉を摘むのだから、人目を避けている。

○四〔将に餧わんとす　呉王の八繭蚕〕　・餧　飼うこと。　・呉王八繭蚕　八繭蚕は、一年に八度繭を作る蚕。左思が「郷の貝ぎは八蚕の繇」（呉都賦）というように、呉の地で地方税の主要産物とされるほどのものだった。それで「呉王にみつぐ」ともじった。一年に八度とれる、ということになると、実際にはそれだけ採れなくても、税金は八度の計算で掛けてくるのが「王様」というものだから、それに見合う蚕を飼うには桑の葉も足りなくなる。見つかったらひどい目にあうのは分かっていても「なあに、また王様に返すんじゃないか」といった気迫がみなぎっていたのであろう。それが「健婦」の二字に、

滲んでいる。

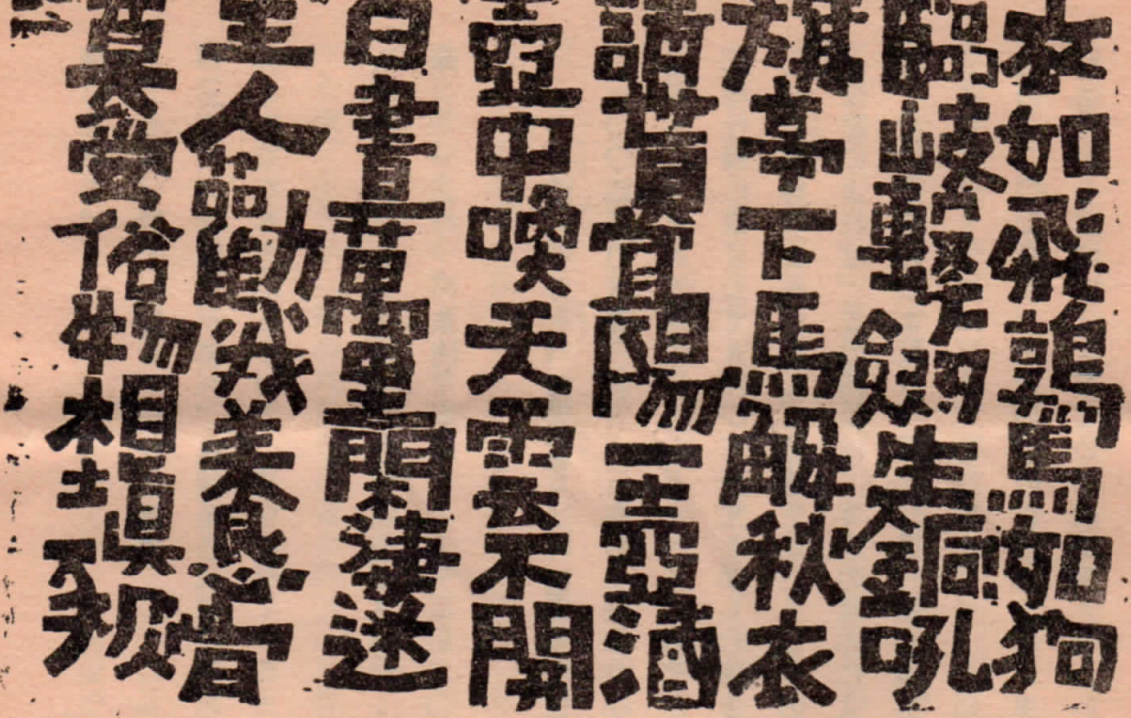
・〈その一〉で「越女」が出た縁で、ここに「呉王」が招かれている。そうしてまたそのお返しに〈その三〉に「越傭」が現れ、呉越そろえば、春秋戦国の武芸譚となって不思議はなく、それが以下の作に次々出てくるところからも、連作のテーマの一貫していることが知られるだろう。

※前号正誤　七頁一四行　観覧に任ぜざる　↓　観覧に任えざる　一七頁一一行　談賓録　↓　譚賓録　一三行　邱象随所引　↓　太平広記二〇五　（以上の正誤は荒井健氏の示教による）

松本幸男『魏晋詩壇の研究』（朋友書店）1996・09　原田憲雄

一〇〇四頁の大著。既刊『阮籍の生涯と作品』『袁枚伝（アーサー・ウエイリー）』の二冊を除き、一九五七―一九九五年のほとんどすべての研究が集められた。多くを発表時に読み、秀抜な見識と綿密周到な行論に注目してきたが、研究を楽しむ著者の姿にもっともうたれた。視力の衰えたわたしには、ただちに全巻をよみかえして感想を述べることのできないのが残念である。

後記によれば、この論集は、著者の意志によってではなく、立命館大学卒業生の有志によって計画され、そのうちの松本賢哉、芳村弘道、嘉瀬達男、今場正美、阪谷昭弘、肥田明啓、山口澄子の諸氏が手分けしてワープロに打ち、これをオフセット印刷して製本するという方法で出版された。繁体字の多いこの一〇〇〇頁を、先進のために打ち上げた淳厚な人たちの姿が目に浮かび、そのように心篤い後進と松本氏との間柄は、きびしい切磋琢磨と暖かい友情から生まれえたのであろうことが、しのばれる。



山本のぶを刻（一九九六　一）

李賀　ふさいだ心を開こうと開愁歌

秋風は　大地吹き　百千の草　乾き
太華山の　翠の影に　晩寒生じ
二十歳のおれは　意のままならず
一寸の心うなだれて　さながら枯れた蘭
鵝みたいなボロまとい　犬ほどの馬にのり
岐路に臨んで剣たたけば　青銅の唸りをあげる
居酒屋で馬をおり　秋の上着をほうりだし
「掛けだ　こいつで宜陽の酒を一壺だ」
壺中の天というけれど　呼べど答えず　雲開かず
白昼　万里　なにがなんだか　侘しいばかり
主人がおれにご忠告　「土性骨　養うて
受けちゃいけねえ　俗物共のてんごう　無礼を」

彫刻の初めの四行は第一六六号に載せた。このたびの訳は、その分も加えた全文である。　（1996 1 3　原田憲雄）

朝

1995 11 27

原田　慶

冷たい朝
陽が昇るまえの
水晶のような空の中なら
とがったビルの形にさえ心ときめく
人間がみんな眠っている束の間
地球は自らの姿を取り戻しているようだ
黄金の落葉が散り敷き
朝露にしめった庭を
わたしは初めて出あつたような
新鮮さで見つめる
門をあけて外を掃いていると
しゃべったり笑ったりしながら
影ぼうしのような男がひとり
通り過ぎていった

立冬

1995 11 08

原田慶

朝早く出かけて
身体の中まで風に吹かれ
吹きちぎられそうになって帰ってきた
田の中を縦横に行く農道は
積み上げられた砂に枯れ伏す草
まだ踏みならされず
水たまりの深いくぼみと突き出ている小石
風はどこから来てどこへ行くのか
わたし達からすべてをもぎとろうとでもするように
山裾から田を渡って激しく吹いた

大工の寅蔵さんは
享年八十一歳

村で家や蔵をいくつも建てたが
「とうとう自分の家は建てられませんでした」
と奥さんが言い
「名人とはそういうものです」
と応えると奥さんは
うつむいて鼻をふいた
ああほんとうに寅蔵さんの仕事は名人技だった

見上げれば空は青く晴れ
鳶が高くのどかに舞い
雲は光の丘
吹き荒れる地上で
梢にうずくまる灰色の鳩よ
天は何故あのように静かなのだろうか

裏門

1995 11 27　原田慶

狭い門の中に
やせた山茶花の木があって
枝が見えないほど一面に花を咲かせている
バス通りに面しているその門から
ごみの焼却炉と花壇が見えるけれど
いつも辺りに子どもはいない
門柱に学校の名前が書いてあるから
学校の裏門なのだ
すぐてばはガレージで
その横が風呂屋で
前に自動販売機が並んでいる
ぴかぴか光って
ジュースとアイスクリームを売っている